

りもない。しかし、幼い頃から、わが子を叱咤激励するために、しきりに母が口にくれたこの歌を始めとして、次から次に、わが身を支えた大事な言葉が浮かび出る。

「すぐれた人物とは、接する者に、見るべきものを見させ、想い起こすべきものを、しっかりと想起させる人。」——定義の一つとして、こうしたことも言えるのだと思えてくる。

今更乍ら、西行を慕いつつ生きることを、嬉しく思う。限りのない嬉しさである。

己れが日々を送る場が、既に十分に恵まれたものであっても、得ている地位や名譽、経済力、よしとされる人柄、言動等々に、もうこれで十分と胡座を組むことなく、どれ、もう一步跳びあがってみるか、気合を込めてみる。気合は入るが、その体に、妙な力みは見られない。そうした、人としてのありようが自ずと浮かび出る。西行に親しむ中で、いったいいい目を見た。

「地上一寸に浮く」の言葉は、これまた西行を愛する者の一人である中野孝次氏から教えていただいたものであった。

バタバタと一気に階段を駆けのぼって高きに至る必要はない。ゆっくりゆっくり、それでも「地上一寸には浮く」べく、無理のいかないうちに努力を続けていくことだ。

西行に接していると、限りなく穏やかな世界に浸りながら、それでも、天空高きに至りたいとの切望が湧く。

どうしてなのであろうか。

大方、すぐれた人、いい人、言葉をかえれば、本物の「夢追い人」は、近づく者の全てに、何の分け隔てもなく、わが身に備えているものの全てを、惜しみなく配り与えて、なお、ゆとりある笑みを浮かべ得る存在なのであろう。

西行に関する二つ目の論を記すことで、「西行を書く」ことの資格は戴いたかと思う。西行の享年は七十三歳。西行を慕うこと、いかなる者にも退けをとらなかつた辻邦生も、西行と同じ程には生きて、西行を書いた。

私は、幸いにも、七十三にはまだまだ間がある。私は、第三、第四、第五の「西行論」を、よりしっかりと西行を慕いながら、また、敬愛する辻邦生を偲びながら、記していく。

主要参考文献

- 久保田淳編『西行全集』貴重本刊行会
- 渡辺 保著『西行山家集全注解』風間書房
- 安田章生著『西行』彌生書房
- 桑原博史著『西行とその周辺』風間書房
- 目崎徳衛著『西行の思想史的研究』吉川弘文館
- 山本幸一著『西行和歌の形成と受容』明治書院
- 佐々木克衛著『中世歌論の世界』双文社出版

〔平成十二年十一月三十日 受理〕

ない。例えば掛詞のレトリックとなると、これをふんだんに活用しているが、妙に分かりにくい技巧は一つだに見当たらない。胸中に湧き出るものを、湧き出る儘に、三十一の文字に置きかえていく。歌は、創るのもそれでよし、味わうのも、またそれでよいのだと、西行は無言のうちに語っている。

ただ、西行が、いかに歌は詠むべきかの勉強を疎略にし、怠ったと見ると、それは大きな過ちを犯したことになる。

何事であれ、限りなく自然なる姿でものごとが誕生し、ここには、呻吟苦悩の跡は少しもないと、接した作品を、気楽に眺めさせるに至る迄には、ひとり、人影のない樹林の中に身を置いて、幾度も幾度も血を吐く努力がなされているのだ。

「春の部」と「夏の部」を味わい終えた今、西行の温もりと、生きる姿勢の見事さが、よりしっかりとこの身に伝わってくる。有難く、嬉しいこと、この上なしである。

よむがき

すぐれた人物を、仮りに、僅かな言葉で定義づけるとすれば、どんな表現が可能となるのであろうか。

西行を想起して言えば、私は、

接する人々に、その人自身の過去の歩みをしっかりと思い起こさせてくれる人。

過去を照らし出しながら、進む未来に、勇気と元氣を与える人。

どんな場に身を置いてもよい。ただ、置いたその場その場で、見つめるべきものは、貪欲に、余すことなく見つめることだと、教えてくれる人。

人生、思うにまかせぬことはわんさどある。しかし、そのことが、人生放棄を許してもらう理由には、何一つならないのだと、諭してくれる人。

そして、何よりも、

優しさの何たるかを、しっかりと示す人。

西行に倣って、湧き出る思いの儘に記してみると、こういうことになってくる。

それにしても、西行の歌を鑑賞し、西行と意思を一つにしながら過ごしていると、次々と、己れを支えて来た過去の言葉が浮かび出る。

汝自身を知れ。

人間、強くなければ生きられない。優しくなければ、生きる価値がない。

明日ありと思ふ心のあだ桜

夜半に嵐の吹かぬものは

最後のものにしても、「あだ桜」は、西行の「桜」とは何の係わ

歌番号二二三の詠。

同じく欲ばりの歌。「をぐらの山」で鳴くほととぎすの声を、これ全て、大井川の井ぜきによって塞き止めて、一網打尽にしたいというのだから、願いは大きい。

歌番号二二五の詠。

西行が、いかに桜に思いをかけ、これを愛してやまなかったかは、「春の部」が、明明白白に示している。

しかし、西行は、偏執の人ではない。桜花の季節には、心ゆくまでこれを味わい、その時が過ぎれば、新たな季節の中に、また大きな喜びを見出し、感謝する。

夏山の生気あふれる青葉の中にあつて、ほととぎすは、時に、「テッペンカケタカ」と鳴き、「ホツチヨンカケタカ」などとも鳴いてみせる。そうした姿に接していると、新たな季節の、新たな喜びは、過ぎた春の、あの例えようのない桜花の風情にも何ら劣ることはないのだと、西行は手にした歓喜の中に身を沈める。

吉野にも、京の街中にも、雪深い北の国にも、山中にも、そして、春夏秋冬のそのいずれにも、生きる楽しみは、みなそれぞれに溢れている。西行の、生きる姿勢の根底には、そうした底抜けの樂觀性も多分にある。

ところで、「春の部」に、「桜花」以外の題材の名歌が数多くあるが如くに、「夏の部」にも、「ほととぎす」以外の名歌が、これまた沢山詠まれている。

余計な解釈、鑑賞は抜きにして、それらの幾首かを次に記す。

200 神がきのあたりに咲くもたよりあれや

木綿^{ゆふ}かけたりと見ゆる卯の花

235 五月雨の軒の雫に玉かけて

宿をかざれる菖蒲草^{あやめぐさ}かな

242 五月雨に小田の早苗やいかならむ

畔のうきひぢあらひこされて

259 思はずに侮^{あなづ}りにくき小川かな

五月の雨に水まさりつつ

262 仙人の暮に宿かるこちして

庵をたたく水鶏^{くひな}なりけり

269 雲雀あがる大野の茅原^{ちばら}夏くれば

涼む木陰をたづねてぞ行く

275 むすぶ手に涼しきかげをしたふかな

清水にやどる夏の夜の月

284 みそぎして幣^{ぬさ}きり流す河の瀬に

やがて秋めく風ぞ涼しき

結局は、心を素直にし、純なる思いで、一生一度の生涯を生き抜くことが大事なのだということか。

西行の歌は、そのいずれも、詠まれた世界と表現に、何の銜いも

ない。

201 ほととぎす人に語らぬ折にしも

初音きくこそかひなかりけれ

西行が、こころを鍛える修行を、いい加減にしたとは思えない。それにしても、「無言の行」の真つ最中に、郭公の初音を耳にして心躍らせ、口を利用してはならぬ修行中なるが故に、この喜びを他の者に語ることが出来ないのは、いかにも残念なことだと、歌に詠んでいるのだから、「行」に励みつつ、心は、「ほととぎす」に向かっていたことは間違いない。厳しく己れを鍛える折にも、こうした心のゆとりと、喜びを他と分かち合わんとする本物の遊び心を、西行は持っていた。

205 たづぬれば聞きがたきかとほととぎす

今宵ばかりは待ちこころみむ

207 待つ人の心を知らばほととぎす

たのもしくてや夜を明かさまし

211 待つことは初音までかと思ひしに

聞きふるされぬほととぎすかな

213 大井川をぐらの山のほととぎす

井ぜきに声のとまらましかば

215 ほととぎす聞く折にこそ夏山の

青葉は花におとらざりけり

歌番号二〇五の詠。

うろうろとしているだけでは、何も手には入らないのだとよく言われるが、ほととぎすの声を聞くにも、あちらに身を置き、こちらに場所を移しという過ごしようでは、目的の達しようもない。それ故に、今宵は、じつと家にこもって、ただひたすらに、その声を待つてみることにしようというのである。

西行の、幾つになっても変わらぬ子供心と好奇心が、自ずとほおを緩ませてくれる歌である。

歌番号二〇七の詠。

人は、今夜こそはほととぎすは鳴くと決めこんで、夜を徹してその声色に耳を傾ける。しかし、鳴く、鳴かぬは、ほととぎすの勝手なのだ。誰よりも、ほととぎすの声を聞くことを楽しみとしながら、西行は、「人間の勝手」を、にたにたと、声を殺して笑い、見つめている。

歌番号二一一の詠。

「初音」を聞けば、それで十分と、「初音」を聞くまでは思っている。いざ、幸いにしてそれを耳にすると、せつかくのほととぎすの季節、聞き飽きるまで聞かせてもらわなければと、欲を出す。いものを求め願って、「もつと、もつと」と願う思いに、俗人も、出離の人も、何の違ひもあろうはずがないのである。

1年くれぬ春来べしとは思ひ寝に
まさしく見えてかなふ初夢

と歌い、立春の到来と、待ち望んでいたことの成就を、明るく、万歳と祝しているが、西行が、わが終焉の時を想って歌った、周知の二首の歌、

88 願はくは花のしたにて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ

89 仏には桜の花をたてまつれ

我が後の世を人とぶらはば

こういう桜の歌の世界となると、西行の胸中からは、もはや、桜花に係わる理屈の思い、強いて、哲学に至らんとする追求の姿勢、それらの全てが、きれいさっぱりと消えている。そこに、厳然として存在しているのは、桜に対する全幅の信頼であり、己れの命そのものと化した桜花の姿である。

人は、わがよしとするものへの思いを、徹頭徹尾大事にし、わが愛する思いを、微塵の汚れもないほどに昇華させ得た時、相手が、人であろうと、物であろうと、相手そのものを、希求する己れそのものと、紛らうことなく、一体化させていくのではないのか。

『山家集』の「上の部の春」に収められた数々の桜花の歌を目にする時、記したとき思いが、じわじわと、そして、最終的には、強く、激しく湧いてくる。

思えば、人には、その誕生においても、成育についても、また、

己れが身を置く学問の場と、その後の世渡りのありようについても、千差万別、まさしく一人ひとりの生きざまがある。そして、その途中中の生きざまを、己れの勝手で変更し、進む道の方角転換を計ることは、容易なことではない。

しかし、己れの人生において、これは、私にとって不可欠のもの、掛け替えない不動万全のものとして、或る物、或る事柄に、渾身の思いを注ぐことは可能である。

西行の場合、その渾身の力を振り絞って、思い慕ったのが、桜であつた。

常緑の山肌に、その時ともなれば、あつ、山桜が咲いていると、即座に分かる際立つ美しさ、粗末な家の、他には、これという目をひく樹木の一本だにないのに、周囲の美しさの全てを引き寄せる姿で、開花を誇っている山桜。そして、吉野の山を全面埋め尽くす桜花の誇らかな威容。桜の花は、貧しき者にも、淋しき者にも、富める者にも、ひたすらに、とめどなく優しい。

思えば、そのやさしさを、存分に吸い込み、飲み込んだ西行が、やさしくなかった筈がない。

それ故に、西行愛好は、即、やさしさ愛好でもあるのだと、ふと思つてみたりもするのである。

第2章 『山家集』上・夏の歌

『山家集』にあつても、「夏の部」の主役となるのは、「ほととぎす」である。

「しでのたをさ」、「たまむかへどり」とも呼ばれ、死出の山路の案内役を務めてくれる鳥であつてみれば、あだ疎かにできるはずも

こうと、桜花がしつかりと枝についているように、ゆるぎなくとじつけておいておくと、切望するのである。

一度きりの生涯を過ごす上で、人事や経済のみに関心があるというのは、お互いにまことに侘びしい。人は、春夏秋冬の自然の移ろいに心を躍らせ、よしとする樹木や花に、格別の思いを寄せるといった行為によって、日々の生活にどうにか潤いを持たせることが可能となるのだ。それ故に、西行が、ひたすらに桜に思いを寄せ、これを愛でたというのも、西行の生涯にとっての、一つの大きな幸せであつた。

だが、西行の桜の歌を、一首一首丹念に眺めていく時、西行の花への思いは、その美を、ただただ讃美するだけの、単純なものではないのだと気がつく。

129 もろともに我をも具して散りね花

うき世をいとふ心ある身ぞ

花よ、おまえが散り急ぐのは、浮き世を厭うてのことであろう。その厭世の思いは、おまえだけのものではない。私もまた、俗世を離れて、厭離穢土、欣求浄土の世界に身を置きたいのだ。

西行の桜を恋うる歌からは、時にこうして、大きな呻きが漏れてくる。

思えば、西行の出離の願いは、たまたま、ある状況下に置かれた故の、思いつき、考えつきといった軽薄なものとは、その本質を根底から異にするものであつた。

105 わきて見む老木は花もあはれなり

いま幾たびか春にあふべき

この歌にしても、何も歳老いての詠ではない。西行は、既に生きる力の潑刺たる若い時から、老木の花にも、しっかりと目を向けていた。老木の桜には、もはや、かつての華やかさはない。今後、廻ってくる春の、その何回ほどを、美しく花開かせて迎えることができるのか、その答えは、まことに覚束ない。

こうした姿を、西行は、心の目でもじつと見つめている。そうして、老木の後方に、ぴつたりと若きわが身が寄り添っているのを、はつきりと見てとっているのである。

87 花にそむ心のいかで残りけむ

捨てはててきと思ふわが身に

脱俗、遁世は、もとより現世への執着心の放棄である。その執着追放は、何も俗人の世界に対するだけのものではない。自然界を含む、世の一切のものに対する拘りが払拭された時、真に脱俗、出離は成就する。

しかし、現実には、人の行き着き得るところは、理想の郷からまことに程遠い。俗世間への拘りからは、一応の解放を見たと思つてみても、「花にそむ心」となると、詠歌が如実に示すごとく、それへの執着の度は、一向に薄まっていかなないのである。

それでもやはり、人間界も捨てたものではない。悶えの後には、幸いにして、安らぎの波が寄せてくる。

「春の部」の冒頭において、西行は、「立つ春」を念願通りに迎え得た喜びを吐露し、

180 跡たえて浅茅しげれる庭のおもに

誰わけ入りてすみれつみけむ

186 岸近みうゑけむ人ぞうらめしき

波に折らるる山ぶきの花

このように、「すみれ」や「山ぶき」を詠んだ歌があり、その他にも、「かきつばた」や「つつじ」が歌われてもいる。そして、花々に色どりを添えるべく、「かはづ」が顔を覗かせたりもする。

189 水さびるて月もやどらぬ濁り江に

われすまむとてかはづなくなり

それにしても、結局のところ、「春の部」で詠じられている歌の圧倒的多数は、「桜花」である。西行は、やはり、世の人々が等しく評する通り、「桜の詩人」と言ってもよい。

173 うぐひすは桜に梅のかをるをりは

庭の小竹によだれをぞする

桜や梅の季節になると、うぐいすは、しばしばこれ迄の常宿としていた所を、そこは「よだれ」、即ち、「夜離れ」の場所とし、梅や桜のもとに、つつい寝泊りを重ねる。うぐいすは、それほどに梅や桜を好むが、より一層、花のもとから離れ切れないのが西行である。

その思いが、過ぎたるものとなる時、

142 心得つただひとすぢに今よりは

花ををしまで風をいとはむ

といった種類の歌が誕生する。

風よ、桜花を散らすならば散らせてみよ。自分は、わが心の全てでもって、悪行を為す風を憎んでやる、というのである。

158 花と聞くは誰もさこそはうれしけれ

思ひしづめぬ我心かな

150 春風の花を散らすと見る夢は

さめても胸のさわぐなりけり

162 風ふくと枝をはなれて落つまじく

花とちつけよ青柳の糸

梅花に対する大和人の思い入れも強いが、桜花は、この大和の国にあつては、遥かの昔から誰彼を問わず、親しみ、愛されてきた名花中の名花である。

しかし、西行の、この桜花を思う気持ちは、極度に強い。開花の時期となると、まさにひねもす恋い焦れて、どうにも心を鎮めることができなくなる。

それ故に、春風が、咲きかおる花を、はらはらと散らす夢を見てしまうと、はつきりと目が覚めても、なお胸の騒ぎは納まらない。

そして、青柳よ、その細く縊った糸でもって、いかに厳しい風が吹

西行考 その二

『山家集』上の部の春夏の詠に見られる西行の一側面

山下 忍

はじめに

私は、歌聖西行についての第一回目の論述テーマを、『西行考』——その出離と、生と死に係わる一考察——とし、西行の脱俗と、その生死観に関する私なりの思いを記した。

その論の「第三章」においては、それなりの数の西行詠に触れたが、論述するに許された紙幅等の関係から、「出離」、「生」、「死」という、大きなテーマを論ずる裏付けの歌数としては、余りにもその数が少なかった。

そうした状況と、残した悔いとの上に立って、今回は、ひたすらに、「歌」そのものをとりあげ、論じてみる。

西行は、歴とした歌人である。小説家を論ずるには、その著作の小説を精読するに如くはなく、画家ならば、その人の描いた絵そのものを鑑賞することで、その絵画きの内面がしっかりと浮かびあがる。西行をよくよく分かってくれるものは、結局は、西行の歌そのもののものだ。

渡辺保氏が、苦勞を承知の上で、『山家集』の全ての歌に目を通して、その一首をも疎かにすることなく注釈し、遂に、『西行山家集全注解』を世に出したのも、一番肝要な行為、即ち、西行の歌でもっ

て、西行を語らんとしたからである。

西行は、西行がこの世に残した膨大な歌のその全てを鑑賞した時に、最もよくその全貌を現してくれるのである。

私が、私なりの「注解」で、どこ迄渡辺氏の成果に近づけるかは、何の予測も立たない。しかし、渡辺氏は、六十代半ばにして、初めての研究書を、名著として世に出した。

そして、今現在の私の年齢は、渡辺氏が、己れの為し得た世界を、世に示したその時と、全く同じである。誕生させ得るものに優劣の差はあっても、努力を重ねる姿勢には、何の違いもなかったと、もし、かりに、評価されるとすれば、国文学の世界に共に身を置き、西行を等しく追い求めた者として、幸甚これに勝るものはない。

文中の歌の頭に付した所謂「歌番号」は、渡辺氏の業績に敬意を示し、『西行山家集全注解』に施されているものを使用させていだいた。記して、深甚の謝意を表する。

第一章 『山家集』上・春の歌

『山家集上』の「春の部」には、桜花以外の花々を詠った名歌も幾首がある。